

松本清張全集 23

松本清張全集

23

文藝春秋

---

---

松本清張全集 23 喪失の儀礼・強き蟻・他

---

---

定価 1400円

---

1974年4月20日第1刷 1978年4月15日第3刷

---

著 者 © 松本清張

---

発行者 樗原雅春

---

発行所 株式会社 文藝春秋

---

〒102 東京都千代田区紀尾井町3

---

電話(代表)03-265・1211

---

印刷所 凸版印刷株式会社

---

---

落丁乱丁はお取替えます

喪失の儀礼

3

強き蟻

189

聞かなかった場所

379

解説 井上 俊

498

装帧 伊藤 憲治

# 喪失の儀礼



## 蒼白き死

ある年の三月十三日から十五日までの三日間、名古屋で内科医ばかりの学会が開かれた。大学の付属病院に勤務する医局員ばかりでなく、開業医も「勉強」のために参加していたのである。その年は名古屋の私大医学部が幹事役に当たったので会が土地で開かれたのだが、東京、大阪、京都をはじめ北海道から九州にいたるまで約二百名あまりの参加があった。

もっとも、この種の「学会」の数は少なくない。内科といっても専門的に細分化されているのでそれに応じていくつもの学会があり、その上、出身学校系統別にもつくられているから、少し大げさに云うと一年を通じて学会が始終どこかで開かれていることになる。

名古屋のその学会は、最終日の十五日午後三時には切上げられ、一同で犬山に向い、溪観荘ホテルというのに入った。六時から懇親会である。

こうした費用は「恒例」により製薬会社の寄付で大半がまかなわれる。今回は栄光製薬がうけ持ち番であった。が、どの製薬会社がその費用に寄与しようと、この事件には直接の関係はない。たとえ、そこに不明朗な利益の相互関係が存在しよう。

東京からこの学会に参加したなかに明和医科大学病院の

住田友吉がいた。内科の医局員だが、講座制によって講師の資格だった。

住田は三十八歳で、二人の子供がいた。面長の顔で、額骨が出っ張り、顎の線が角ばっている。眼鏡の奥の近眼はとびだしたように大きく、鼻は扁平に近い。頭の毛が少し縮れ、眉が濃く、色は黒いほうで、そのひろい額はいつも汗が滲んでいるように脂がうかんでいた。

住田は明和医科大学病院内科では診療主任であった。部長は教授だが、患者の実際の診察には減多に当らなかつたので、その下の助教授が部長代行のようなかたちで医局を統轄し、住田と、もう一人の主任とを動かしていた。医局員は総勢で十二人居た。総合大病院だからほかに外科も婦人科も眼科も泌尿器科も耳鼻咽喉科も備わっていた。

《昭和六年四月生。本籍、新潟県三条市。N大学医学部卒業。成績優秀。明和医科大学病院勤務十四年。診療技術優良。性格——診療に積極性あり、研究心旺盛。上級者によく、同僚との折合いは可。患者の受けは頗るよし。看護婦に對しやや酷使の傾向があるが、それも本人の診療熱心の現われとみる評あり。多少孤独癖があるが、友人との交際は普通。妻文子（三二）との間に一女（八）一男（三）あり。夫婦仲よし。現住所、東京都大田区大森××番地。趣味は俳句。『秀樹』同人。マージャン。酒、晩酌二合程度。現在のところ婦人関係なし。病院の同僚と私的な往来はあまりない。俳句の同人仲間の数人とは親しい。『秀樹』はいわ

ゆる現代俳句の傾向である」

これが警察で調査した住田友吉という被害者の大体の輪郭である。どうせ病院の関係者から聞いたことを主体に、他の友人や近所の評判などをあつめて合成したのだろう。

これによると、住田は病院の医者として優秀なほうで、趣味も悪くなく、夫婦仲はむつまじい。浮いた噂がないというから、友人関係の円満と共に、まず申し分ない人物という印象を警察では受けたことになる。

ただ多少気になるのは「診療に対して積極性」という点である。医者が診療に積極的なのは、決して悪いことではなく、むしろ称讃すべきことなのだ。患者が感謝する医者に違いない。だが、それは開業医の場合で、総体的にいつて大学病院につとめる医師としては、ときとしてその特異な積極性が他の医局員の迷惑となる場合がないとも限らない。部長ともなれば別だが、平の医局員のなかにそんな人間がいると、多少でも勤め人的な資性を持つている連中には、「余計なこと」をするという感情が起らぬでもあるまい。他人の眼にはどうしても自分と比較されて見られるのである。勤勉な人間はときどき職場の仲間に見下ることを与えることがある。

しかし、あとで警察が調査した限りでは、医局の中で住田はうまくいっているほうであった。ただ、その仕事熱心ぶりはだれもが認めていたが、それに相当するだけの尊敬はあまり払われていなかったようである。それは、他人迷

惑という点にもかかわるのだが、その熱心さが住田自身の立身出世主義と関連があるように見られたからでもあるらしかつた。

だが、そのようなことはどの勤め人の世界にもある。そのために特に住田が医局の中で憎まれているわけでもなかった。あれはああいふ人間だということと通つてしまひ、ことさら同僚間の摩擦はなかった。ただ、住田の仕事に対する積極さが看護婦たちには人使いの荒さとなつて被害感を与えるくらいのものであった。「同僚との折合いは可。看護婦に対しやや酷使の傾向がある」と警察が書いたのも、以上のようなことの要約だった。

住田友吉が溪観荘ホテルの大浴場に午後五時ごろ他の学会出席者といっしょに浸っていたのは確実である。この浴場は岩風呂と称して奇岩怪石が壁にはめこんであるが、湯気のせいもあって、こっちの端から向うの端が霞んでよく見えないくらいだった。一方の大窓には眼下に溪流と岩礁とを見下ろし、それがまた岩風呂の風情と似合った。ホテルは最近出来たもので、犬山橋から木曾川の上流に向つて北岸の鵜沼の側にある。この犬山橋と上流今渡の間十三キロが「日本ライン下り」で、ホテルの窓下の船着場にも始終舟が集まっている。

住田が岩風呂の中で眼をつむつて陶然となつてゐるところに、東京から来ている別の大学病院の医局員Aがへこんだ腹を見せながら近づいてきた。

「住田さん。今夜は宴会のほうは少し早目に切りあげてマ  
ージャンでもやりませんか。明日は日曜だし、東京には夕  
方までにゆつくり帰ればいいでしょう」

その声に住田は眼を開いて、ちょっと間の悪そうな笑い  
をつくって答えた。

「いや、それがね、そうはゆかなくなつたのですよ。ぼく  
はこれから宴会も失礼して、ここを出かけることになつた  
のです」

「ほう、今からですか。すると、病院のほうに気にかかる  
患者でもあるのですか」

住田の診療熱心を知っているAはそう訊いた。

「いや、患者のことじゃありません。……この近くにちょ  
つと知つた人がいましてね。どうしても、今夜その人に会  
う用事があるのです。宴会に出てすぐ消えるのでは皆さん  
に悪いから、風呂だけ浴びて失礼しようと思っています」  
住田はそう云つたあと両手で湯をすくって顔を洗つ  
た。

《住田氏から用事が出来たので今夜はホテルに泊らないと  
いう申出をうけたのはその日の午前中でした。何でも知人  
が名古屋の近くにいますから、土曜日なので、その人を訪ね  
る約束をしたということでした。それで、わたしのほうは  
割当てた部屋を変更するやら、宴会の料理を一人前減らす  
やら、ちょっとあわてました。もう少し早く連絡してもら  
うとよかつたんですが、住田氏もその時になって急にその

気になつたのか、あるいは相手の人からそう云つてきたの  
か、どちらかでしょうね。でなかつたら、学会のはじまる  
前にそういわれるはずですから》（三月十七日午後四時）

幹事役が警察に述べた言葉である。

名古屋近くにいる知人とは誰のことか。

《わたくしには心当りはありません。主人は一度もわたく  
しに名古屋近くに知合いがいると話したことはありません  
し、手紙もはがきも来たことはありません》（三月十七日  
午後六時）

妻の文子の話である。

《さあ。われわれも住田さんから一度もそんな人の話を聞  
いたことはありませんね。……患者関係ですか。そりゃ、  
病気を癒（なほ）してもらつた地方の人が、そのお札に近くを通り  
かかつた医者（い）を呼ぶことはたまにあります。それに、事  
前（まえ）にその連絡があるはずですからね。今度の場合、名古屋  
の学会に住田さんが出席することを新聞か何かで知つた人  
だとすると、出発前に住田さんに電話するか手紙を出すか  
するでしょう。住田さんがホテルにも泊らないでその人を  
訪ねて行くくらいなら、われわれにそのことを話さないわ  
けはないと思います。念のため、一応、名古屋方面か  
らこの病院に来た患者をカルテの中から探してみますが  
ね》（三月十八日午後二時）

おびただしいカルテのなかから過去三年間、名古屋付近  
から来た患者を拾うという厄介な作業（これは看護婦の仕

事になったが）の結果、二十数人が及び出された。が、警察が当つてみて、いずれもその事実がなく、事件にも無関係と判つた。

『秀樹』の同人は、東京が中心で、京都、大阪、福岡に数人ずつ居ます。名簿はこれです。名古屋付近には一人もいません。同人というのは、いわば秀樹社の幹部級の俳人で、全部で三十二人です。住田さんもその一人です。創立当時のメンバーではありませんが、投句がすぐれているので推薦で会員から同人になった方です。会員というのは全国に亘つて四百人以上居ます。もちろん名古屋市内にも、その付近にも在住者があります。しかし、同人ならともかく、一般投稿者の会員のところに住田さんが学会の懇親会をすっぱかしてまで訪ねて行きますかねえ。それだったら、日ごろから住田さんと交際や文通があるだろうし、げんに住田さんは名古屋に出発される二日前に、ぼくのところにもえましてから、そのときその話が出るはずですがねえ』

（三月二十日午後一時）

現代俳句誌秀樹社主宰山科伊佐緒<sup>やましなさいさお</sup>の供述である。

住田友吉は三月十五日午後五時四十五分に溪観荘ホテルの玄関に小さなスリッパース一つをさげて立ち、ホテルに云いつけて呼ばせたタクシーを待っていた。

このとき、栄光製菓株式会社の販売部係長の小池<sup>こいけなつきち</sup>為吉が傍を通りかかつて住田の姿を見とがめた。

「おや、住田先生、どちらへ？」

小池は愛嬌のあるまろい顔をむけた。今度の学会の大口寄付者である栄光製菓は、今夜の懇親会では来賓という資格で「招待」されていた。

「うむ。ちょっとね。この近くに知人がいるので、いいでだから名古屋で遇うことになってるんだよ」

住田はそう答えた。ここではAや幹事に云つた彼の言葉とは少しニュアンスが違つている。住田は名古屋近くにいる知人を訪問するとは云わずに名古屋市内で相手に遇うと小池に告げている。

「ほう。それでは宴会の席でゆっくりお目にかかろうと思いましたが残念でしたね。すると、今夜は名古屋にお泊りなんですか？」

「余計なことを訊いたように思われますが、わたしのつもりでは、その知合いの方に遇われたのちに東京にお帰りになるのか、それとも名古屋に一泊なさるのかと、気軽に住田先生におききたわけです。まあその場の挨拶みたいなものなんです。そのとき、先生は、ちょっとバツの悪そうな顔をして、今夜はこちに泊ることになるだろうね、名古屋になるかどうか分らないが、と云われました。そのときの調子では、相手とどこかで落合うけれど、その先はどこかまだきまつていないというふうに受取れました。さあ、その相手の人が男性だか女性だかはちょっと判断がつかみません。バツが悪そうな表情をなさつたのも、懇親会を

すっぱかすことになったからじゃありませんかね」(三月十九日午前十一時)

警察の問いに対する小池の答弁だった。

ここで行方不明になる前の住田友吉の予定行動がやや明確になった。すなわち彼は「名古屋近くの知人」の家を直接に訪問したのではなく、その知人と何処かで落合い、それから実際の行先なり泊り先なりを決めるつもりだったようである。

問題なのは、住田がその相手の人物と会うことをどのようにして約束したかである。妻の云うところでは名古屋方面からの文通はなかった。もっとも、それは住田が家でなく、病院から電話で連絡をとることもできるし、手紙が病院宛にくることもある。

《住田先生には手紙やハガキが一週間に五、六通くらいいやりできていましたが差出人の名前はいちいちおぼえていません。男名前も女名前もありましたが、患者からの礼状が多かったと思われれます。ハガキの文面がそうでしたから電話はほとんどかかってきませんでした。たまにかかって、それは俳句関係の方だったと思います。住田先生のお話し方でそれと分りましたから。先生が名古屋の学会に出張される前日も前々日も何も電話はかかってこなかったと思います》(三月十七日午後三時)

これは明和大学病院内科の看護婦たちの供述を総合したものである。

もし、住田友吉が東京出発前に名古屋で誰かに会い、そのために浜観荘ホテルの宴会にも出られず、ホテルにも泊れないことが分っていれば、彼は学会が開かれた初日の十三日に幹事(地元大学側)にその旨を申入れていなければならぬ。ホテルの部屋割りがすでにきまっているから、変更は早いほど幹事に迷惑をかけないですむし、また、それが礼儀でもある。ところが住田がその連絡を幹事に達したのは学会最終日の十五日の午前中だったのだ。

そこで、住田が「名古屋近くの知人」という約束が出来たのは名古屋にきた二日目の十四日という推定が強くなってくる。彼は急に予定を変更したのだろう。が、その約束が十三日だったという線は考えられない。それだったら前記の理由で十四日のうちに彼は幹事に変更を通知するだろうからである。彼は幹事役に「土曜日なので」といっている。そうすると、相手の「知人」は勤め人なのだろうか。十五日午後六時五分前に住田友吉はホテルに呼ばれたタクシーに乗った。それは土地のもので、運転手は杉山という二十六歳の男だった。

「何処まで？」

車を走り出させてから杉山運転手は座席の客に行先をきいた。

「名古屋市内」

「どの辺ですか？」

「名古屋にM町通りというのがあるね？」

「あります。一丁目から七丁目まであります」

「そこまで出たら、降りる場所を云うから」

客は答えた。その声にどこかはずんだような響きがあったと杉山運転手はあとで云っている。

犬山から名古屋屋に入る道も混んでいたが、市内はもっと車が詰っていた。住田が腕時計を何度かのぞくのを運転手はバックミラーで見ている。

「お急ぎですか？」

運転手は客がだれかと遇う時間を気にしていると思ってそう訊いた。

「うむ、なるべく早いほうがいい」

「この時間はちょうどラッシュアワーなので……」

市内に入って客は前方で詰っている車の群れをのぞいた。

「あと、どのくらいかかるかね？」

「三十分はかかりそうです」

客は不満そうに黙ったが、いらいらした様子は見えていた。

《M町通り四丁目までは、それから三十分はたつぷりとかかりました。その四つ角の西側にR洋品店がありますが、お客さんはその看板を見つけると、ここで降ろしてくれと云いました。その様子ではM町通りのことには詳しくなく、R洋品店を目標にして来たという感じでした。お客さんは料金を支払ったのち、黒革のスーツケース一つを提げてR洋品店の入口に向って歩いていきました。それから先は、

人ごみに消えたのと、私もほかのお客さんを拾ったので、その人のことはよく分りません》(三月十九日午後四時)

杉山運転手は、警察にそう云っている。

R洋品店はかなり大きな店で、店員も十人ばかりいた。

《おたずねに似た人は、午後七時五十分ごろに店の正面入口のところで見かけました。三十七、八ぐらいの年配で、眼鏡をかけ、濃いネズミのスプリングコートに黒革のスーツケースを右手にさげていました。わたしはネクタイ売場から偶然に外の人通りを眺めていたので眼に入ったのです。その人が入口のほうに近づいてきたので、店に入るのかな

あとと思って特に気をつけて見ていたのですが、店には入らずに入口の右横手、ショウウィンドウのほうにゆっくりとした足どりで歩きました。そこは、よくアベックなどの待合せの場所に利用されているので、いつも若い人が五、六人は立っています。その紳士もだれかを待つためにそこに行つたのではないかと思いました。というのは、その人は店の入口に近づいてくるとき、あたりをキョロキョロと見回していましたから》(三月二十日午前十一時)

R洋品店の女店員山田和子は警察にそう答えている。

《その紳士は七時十分ごろにR洋品店のウィンドウの前に来しました。眼鏡をかけて、黒いスーツケースを片手にさげていましたからよくおぼえています。時刻も、私が七時の約束で伴れを待ち、度々時計をのぞいていたから間違いはありません。あたりにも相手を待合せる人が五、六人はい

たと思います。けど、その紳士はそこに待合せのためにきたのではなく、私に、このへんに「若葉」という喫茶店があるはずだが何処ですかと訊きました。若葉なら、R洋品店から西側に二十メートルばかり行つてせまい路を入つてすぐですから、そう教えました。その人は、ていねいに礼を述べてそっちの方向に歩いて行きました。ほかに伴れはなく、その人ひとりでした。名古屋の地理がよく分つていないように見受けました」(三月二十一日午前十時)

R洋品店前で恋人を待つていた会社員渡部三夫の話である。

「若葉」という喫茶店は、いわゆる音楽喫茶で若い男女客が多い。ひろい通りからちよつと入りこんでいる。はじめの者には場所が分りにくかった。

《その方は、その日の七時十五分か二十分ごろに店に入つてこられました。席に坐る前に、しばらくうす暗い店の中を見回して、ちよつと約束している人を探しているようなふうでしたが、眼につかないのか入口に近い三番の席に坐られました。それも入口に向つてですから、入ってくる人が分るような位置でした。私がコーヒの注文を聞きましたが、その方はコーヒを飲んでゐる間も、入口のドアが開くたびに眼をあげておられました。……それから二十分くらい経つたところでしょいか、もう一人の女店員の上田とき子さんがかかつてきた電話を聞いていましたが、住田さんというお客さんにこれで二度目の電話だけど、と私に云

いましたので、私はたぶん三番の人ではないかといいました。その人は、まだ人待ち顔にドアのほうを気にしていましたが。私が、三番のテーブルに行つて、住田さまですか、ときくと、その方はうなずかれ、すぐにカウンターのほうに近づき、受話器をとり上げられました。そのあとのこと、わたしもそこを見なかったので分りません」(三月二十一日午後三時)

住田のことをおぼえている喫茶店「若葉」の女子従業員村山貞代の供述である。

《その電話をうけたのはわたしです。それは女の声でした。『医事通信』の青柳の代人だといっていました。二回ほどかかつてきて、最初は午後六時半ごろでした。住田さんというお客さんが来ていませんか、といったので、わたしが店のお客さんに聞いて回つたのですがそのときは居られませんでした。二度目が貞代ちゃんの云う通りです。その電話の声は、わたしの感じでは若い女の子のようでした。やっぱり『医事通信』の青柳の代人といっていました。それも、第一回のときは、電話のそばに人が居て、その人に頼まれて電話をかけたというふうでした。わたしがその方は居られませんが、電話のそばに人が居るにそう告げていました。で、電話の声は傍の人に云われて、それではあとでもう一度おかけしますといつて切られたのですが、傍にゐるらしい人の声は聞えなかつたので、男か女か分りません。……二度目の電話のとき、住田さんという方は受話器をとつて

聞いていましたし、自分からも何か云っていましたが、店内の音楽のためにわたしにはその言葉が分りませんでした。その住田さんという方は、途中で手帳を出して先方の云うことを短くメモしておられました。それから、その方はすぐに店を出て行かれました」(三月二十一日午後三時半)

「若葉」の女子従業員上田とき子の供述だった。

その後の住田友吉の行動についての目撃者はいない。

名古屋駅からあまり遠くないところにホテル・キャッスルというのがある。二年前の建築で十一階建の近代的な建築だった。一階がフロントとロビー、二、三階が宴会場と小食堂、バアなど、十一階が食堂、地階が名店街、客室は約二百室というのも、大きなホテルのもつ型通りの設備であった。

三月十六日の午前十時ごろであった。各階では客室ごとにメイドたちが片づけをはじめていた。チェック・アウトは十一時だが、それより前に部屋を明け渡して出てゆく客が多いから、九時半ごろからすでに掃除やベッドの支度更えがはじまる。げんに六階は北海道の農協の団体が入って九時には出発したのでメイドたちの片づけも早く開始されていた。それは日曜日の朝でもあった。

六二二号室はエレベーターを中心にしてかなりはなれた位置で、正確には建物の西側の隅に近いところにある。メイド二人が順番にそのドアの前になると、ノブに「起す」

「スリープ」の標示板がぶら下っていた。客が朝寝のためとか、何か書きものをしているとか、其の他の理由で従業員が部屋に入ってくるのを好まないとき、この標示板をドアの下に下げておく。普通のこととて、この六階にもほかに二室ほど同じ標示板が下っていた。

それでメイドは六二二号室には入らないで、合鍵をもって隣室からの掃除に移っていた。

「お隣はアベック？」

メイドの一人が仲間に小さな声できいた。

「さあ、どうだか。気になるんだったら、フロントの人に訊いたらいいわ」

六二二号室は、この六階の大半がそうであるようにツイン・ベッドになっていた。部屋の広いのを好む客は一人でも入るから男女客かどうかは分らなかった。

メイドが少しばかり気にしたのは、アベック客のなかには時間切れの十一時いっぱいまでベッドの中に寝ているのや、起きていても部屋の中がまだ狼藉の状態なので従業員の闖入を拒絶するために「起す」の標示板をドアの前に出しておくのが多いからだった。この一枚の標示板の効用は大きかった。

二人のメイドは壁に耳を澄ませたが、六二二号室からは何の音も聞えなかった。話し声が洩れないのは当然で、防音設備は完全である。

フロントの係員二名が六二二号室の前に来たのは午後一

時ごろであった。その前にメイドの知らせで、客の記入名簿をのぞいた。「千葉市入船町×番地・会社員・青山誠三・三十七歳」となっている。六二二号室の宿泊客は男一人で、一泊の予定だった。

ドアには例の標示板がまだ下っていた。係員の年上のほうが強くノックした。予期したように応答はなかった。ドアはドア・ロックになっていて、内部からドアを押しても、外に出るとき閉めてもそのまま自動的に錠がかかるしくみである。係員は合鍵でドアを開け、緊張して部屋の中に一歩入った。

それでも、奥までは行かずに、そこで、ごめん下さい、と一応は声をかけている。この部屋の構成はベッドや机、椅子のある居間（日本間にすれば十畳くらいの広さ）の手前にロッカーと浴室・洗面所の造りつけがせり出して、その間が入口からだと長さ三メートルばかりのせまい通路か廊下のようになっている。つまり、ドアを入ったところからは、そのせり出しのためにベッドはかくれて見えないようになっているのだ。が、反対の壁ぎわの机や椅子などはむろん見通しだった。

部屋は真暗だった。窓の厚いカーテンが昨夜のままに閉じられている。この様子だけでも普通でないから、係員の一人がすぐに窓に急いで、重くたれ下ったカーテンを開けた。

外はいい天気だった。流れこんだ明るい光線が見せたの

は二つのベッドのうち、窓ぎわの一つに、ホテルのお仕着せ寝巻で行儀よく仰向きに横たわっている男客の姿だった。頸の下まできちんと毛布がかけられてある。

係員二人はその顔をベッドの横からのぞいた。眼は閉じている。口をやや開き、前歯と舌がのぞいていた。四十近い男の熟睡している表情である。が、その顔色は蒼白だった。寝息も聞えず、毛布も微動もしなかった。

年かきの係は、これまでの経験でこうした場合の心得を知っていた。彼はメイドが様子を変だど知らせたときにポケットに小さな鏡を入れてきていた。口を開けた男の鼻先に近づけると鏡は曇らず、男の鼻孔と上唇とを明澄に映したままだった。

「死んでいる」

と係は鏡をポケットにおさめて、いまいましそうに云った。

「自殺ですか？」

若い係は、馴れてなかったので蒼ざめた顔できいた。ふるえ声だった。

「自殺かどうか……急な病死かもしれないけど……とにかく警察に来てもらわなあかんわ。君、フロントの主任さんに知らせてくれ」

若い係が泡をくってツイン・ベッドの間の枕元にある電話機をとろうとすると、

「君、それ握っちゃあかん、君の指紋がつくやないか」

と先輩らしく叱った。

若いのが部屋を飛び出して行ったあと、その男だけはそこに残っていた。メイドやほかの従業員たちが集まってくるのを中に入れさせないためと、もう少し部屋の状況を見たいためであった。三、四のホテルを渡り歩いている彼は、過去にこうした経験があったから、やがてここにくるであろうフロントの主任に自分の落ちつきぶりを見せる気持もあった。

もう一つのベッドは青い布のカバーがかかったままだった。枕の上まですっぽりと蔽い、端の襖がきちんとたたまわっていた。昨日、当番のメイドが型通りにつくったもので、かたちは少しも崩れていなかった。人がそこに寝ていた形跡はない。かりに一度そこに横たわった人間があとをとりにつくろうとしても、このように上手にカバーはかけられない。彼はそのカバーの端を試みにちよつとめくりあげてのぞいた。白いシーツには皺ひとつなかった。

しかし、はなれたところにある円卓の上にはビール瓶二本とコップが二つ、それに銀盆にガラス皿一つがのつていた。皿にはおつまみのビーナツとおかきが少しあった。それが二人前で、半分くらい食い残されたものと分った。この不幸な客には昨夜のうちに一人の訪問者があったのだ。

黒革のスーツケースは長い机の端に正しく置かれていた。チャックは閉っている。あまり胸がふくれていないから、中身は多くないらしい。机の上にはホテルで備えつけの通

信用の便箋や封筒類がセットにおさまって置かれているだけで、客のものは一つも載っていない。眼鏡は枕元の棚の上にあった。それが寝る前の習慣のように。

係は部屋中見まわした。ほかに異状はない。室内電話の置いてある棚の上には赤茶色の分厚い本の背が見えた。ホテルが外人客のために備えつけた英文の聖書である。それも定位置からずれていない。もし、外人の自殺だったら、死の前にこのバイブルがとりあげられたらどうか。日本人はよく旅館で自殺したがる。ここまで考えて老練な係は眼を見開いてそこからもう一度死者の顔を見つめた。

色が白いのである。まるで新しい紙のようだった。

はてな、この男は生きてるときから色が白かったのかいな、と係が思ったときに入口の開いたドアの向うにメイドや従業員たちの顔が集まった。

「そこから入ったらあかん、あかん。警察がくるまでこのままにしとかなあかん」

口々に事情を聞いたがる従業員を彼は制した。

その従業員たちの間を分けてフロントの主任が入ってきた。五十近い、肥った男で、英語はうまいが日本語は大阪弁だった。

「おい、どないした、ほんまに自殺か？」

勢いよくとびこんできたが、ベッドの顔が眼に入ると脚をすくめた。